

# 辰巳会ゆかりの

## 祥龍寺の歴史（その四）

（たつみ誌72号よりの続き）

### 菅 應峰

宗信和尚の時代（一隅を照らす者）

の人と云えるのではないだろうか。

巷間に噂の高い「養い育てた二百人の子供達」と云うのも、これは決して誇張ではない。縁あって祥龍寺に来て、一週間なり一ヶ月なり、或いは一年なり三年十年と、寺の仏飯を食つて世間に出て行つた人達の顔は、とても二百人では数え切れないのである。

過去一千年の祥龍寺の歴史の中に、まことにユニークな一頁を書き加えたのが宗信和尚である。この間の消息は、宝積寺鹿岳光雄和尚著「一隅を照らす者」に詳しいので重複は避けるが、こうして祥龍寺の歴史を書き綴つて来て、宗信和尚に到つて時代の変遷まことに急なるものを感ずる。

菅宗信和尚は、明治四十四年八月二十日大分県佐伯市八幡字戸穴に生まる。碧層軒老師の血縁にある。昭和二年四月十六才の時、碧層軒に就き得度、昭和六年より十二年まで祥福寺専門道場、円福寺専門道場に掛塔修行の後、祥龍寺において晩年の碧層軒に仕え、昭和十九年三月祥龍寺住職となる。

宗信和尚を語るには、戦後のあの混乱の記憶を呼びもどして頂かなければならぬ。すべての日本人が明日への希望を失つた終戦のその日から和尚の活躍は始まり、すべての日本人が高度経済成長の恩恵に酔つた昭和四十年代には、ほんとうの意味の和尚の働きは、すでに止んでいたようと思う。

時代の要求に応じて、世間に躍り出た和尚は、時代が去つたと見るや忽然としてその姿を消した。この宗信和尚こそ、時代が生んだ動乱

かく云う私も昭和二十六年の夏の日、因縁の糸にたぐり寄せられて祥龍寺門前に流れついた一人である。丁度その時、朝の掃除をすませて、山門前の溝で足を洗つていて後に兄弟子となつた高田慧穂が、私の姿を見つけて「飯くつたか！」と声をかけて来たのです。

この一言で彼のベースにはまつてしまつたのは、いたしかたがない。こちらは昨日からほとんど何も口に入つてはいないのだ。

典座（食堂）にあげてもらつて、朝の残りの粥をぼそぼそと食べ、部屋に案内されて相見したのが、当時四十才になつたばかりの宗信和尚であった。宗信和尚が私を見て、「まあ一、三日おつてみろ」と云われたその温顔は、五十八年後の今日でも、とうてい忘れる事の出来ないものである。

この頃、寺内には子供連れの家族が四組とほかに十四～五名の若い人達が生活していて、一寸想像もつかない混乱ぶり、和尚の居間もき

まつた部屋がなかつた程であった。

その有様は、善い悪いの分別を離れて、自然さと不自然さの混同した和尚の生き方、つまり己が人間であることの不憫さを、一つ屋根の下の人達と分ち合つて堪えて行こう。人間である限り、誰が誰に対し

て可哀相などと、おこがましい事が云える。可哀相なのは自分自身であるはずだ。人生流転、たまたま水の流れがここで激んで、祥龍寺の伽藍に身を寄せただけのこと。みんなのものが肩を寄せ合つて生き

て行こう。碧層軒老師も口癖のように云われたものだ——馬鹿になれ馬鹿に、馬鹿は気楽じや苦勞の種が胸にないので気が樂じや——と、人間の分別なんてたかが知れている、と云うことではなかつたか。

この生き方が、戦後のあの時期、あの世相にぴたりあつて、次第に宗信和尚の信念となつたに違ひない。兄弟子高田慧穂の「飯くつたか！」という言葉こそ、祥龍寺の寺風を象徴する言葉であつたわけである。

この時期の祥龍寺の様子は、中で生活した方々の手記が、集められているので読んで頂くとして、宗信和尚の永年にわたるこの業績が、中外日報社の涙骨文化賞となり、やがて自然のかたちで大本山妙心寺の宗門功労章となつた。

この時、柳田義一氏の「一隅を照らせば無なる青田かな」の句がある。

昭和四十七年九月十二日、妙心寺大鵬軒において、宗門功労賞を受賞。法階再住職を特授される。次いで昭和五十一年、日本実業出版社から『馬鹿になりきるの記』が発刊され、世間に大きな反響を呼ぶ。



終り